

令和6年度 第2回高松市総合教育会議 議事録

1 日 時 令和7年2月13日（木） 午前10時00分～午後11時13分

2 場 所 高松市役所13階 大会議室

3 出席者	高松市長	大西 秀人
	高松市教育委員会教育長	小柳 和代
	高松市教育委員会委員（教育長職務代理者）	塩見 勝彦
	高松市教育委員会委員	葛西 優子
	高松市教育委員会委員	小方 朋子
	高松市教育委員会委員	富家 佐也加
	高松市教育委員会委員	和泉 憲

4 事務局

（教育委員会）

教育局長	一原 玄子
教育局次長総務課長事務取扱	黒川 桂吾
教育局総務課学校施設整備室長	川西 正晃
教育局総務課課長補佐	春日 布三
教育局総務課学校施設整備室長補佐	児玉 知明
学校教育課長	岡内 秀寿
高松第一高等学校長	北堀 礼子
高松第一高等学校事務長	鶴見 信也
高松第一高等学校教頭	片山 浩司
教育局総務課総務係長	唐渡 みどり
教育局総務課総務係副主幹	香川 有美子
教育局総務課総務係主任主事	道久 拓元

（政策局）

政策局長	蓮井 博美
政策局次長政策課長事務取扱	長谷山 隆義
政策課長補佐	吉田 幸弘
政策課長補佐	齋藤 直樹

（健康福祉局）

健康福祉局長	河野 佳代
こども未来部長子育て支援課長事務取扱	大西 信明
子育て支援課主幹	岡谷 豊

5 傍聴人 1人

6 協議事項

- (1) 本市における放課後児童対策（放課後児童クラブ）について
- (2) 一高生のシビック・プライド醸成につながる産学民官の共創に向けて
～SSHにおける行政・企業とのコラボ～

7 議事の経過

【開会】

【市長挨拶】

○ 市 長

それでは、私の方で進行させていただく。

本日は、今年度第2回目の総合教育会議となるが、「本市における放課後児童対策（放課後児童クラブ）について」、「一高生のシビック・プライド醸成につながる産学民官の共創に向けて～SSHにおける行政・企業とのコラボ～」の2つの議題について協議を行うこととしている。

まず、協議事項1の「本市における放課後児童対策（放課後児童クラブ）について」、健康福祉局 こども未来部長から説明をお願いする。

【議題（1）】

○ 事 務 局（こども未来部長）

（「本市における放課後児童対策（放課後児童クラブ）について」説明。）

○ 市 長

ただ今の説明を受け、御意見、御質問等はあるか。

○ 委 員

放課後児童クラブの具体的な現場のイメージをつかみたいので、放課後に子どもたちがどのようにその場を活用し、過ごしているのか教えてほしい。

○ 事務局（こども未来部長）

放課後児童クラブでは、授業後、低学年であればお昼過ぎには、学校内の教室やプレハブの専用施設に帰ってくる。ランドセルをロッカーに置き、指定の席で宿題や読書、ビデオ鑑賞など、担当支援員が子どもたちの面倒を見て、ある程度指導もしながら、保護者が迎えに来るまで過ごす生活の場や遊びの場である。低学年の子が先に帰ってきて、だんだん高学年の子もやってきて、いろんな学年の子と一緒に過ごしている。

○ 委 員

量（受け入れる教室数）の拡大は大事で、待機児童を少なくするための努力はよく分かる。「小1の壁」は、働く親御さんにとって大きな壁だと報道でも聞くので、着実に進めてほしい。

少子化でも共働き家庭が増えていくので、利用者は減らないと思われる。量の拡大の次には、質の問題がでてくるとされる。空き教室を利用して特別支援学級やサポートルームが増えているという話があったように、放課後児童クラブでも様々な子が利用するようになるので、支援員の質や研修制度の向上が必要で、学校との情報共有も重要になる。量の拡大の次には、これらをしていただきたい。

○ 委 員

特別な支援が必要な子どもたちにとって、皆と同じ児童クラブに入りたくないという子どももいると思われる。

空き教室や場所の不足に対応するため、地域のコミュニティセンターの会議室を利用して子どもたちをサポートしたり、コミュニティセンターのメンバーというか地域の力を活用していただけたらと思う。

○ 委 員

現在、93人の待機児童がおり、主に低学年の子どもが多い状況である。また、多くのクラブでは主に3年生までが利用しており、4年生以上になると諦めて申し込まない方も多い状況である。

このため、待機児童の正確な数は疑問だが、減らすための場所確保は大切である。待機児童が多い学校には余裕教室がほとんどないと思われ、学校との連携調整が非常に難しい。

運営側にとって、教室が遠くに離れてしまうと運営が難しくなる。最近、民間施設に空きが多いということなので、費用面の支援をしていただくなど、4年生以上の子どもたちのための扉を開いていただきたい。

最近、支援を必要とする子どもが増えている。放課後等デイサービスなどの充実も考えていただきたい。支援を必要とする子どもや保護者対応のため、支援員のスキルアップやフォローが必要なので、協力して進めていただきたい。

○ 委 員

待機児童の数は、資料に記載されているもの以上に多いのではないかと。入会希望児童数を基に算定されているが、実際には中・高学年で申し込みを控えている人が相当数いると考えられる。これらの人々の実数を把握するための取組も今後必要でないかと思う。

○ 教育長

放課後児童クラブは、働く保護者にとって必要な施設である。子どもたちがゆったりしたスペースで過ごし、低学年だけでなく中・高学年も参加できるのが理想である。そのためにもプレハブだけでなく学校施設の活用が重要なポイントの1つになる。

数年前、40人学級が35人学級になり、大規模校では1学年当たり1クラス増え、合計で6クラス増加した。特別支援学級の子どもが10年間で2倍になり、余裕教室が次々と特別支援学級の教室に変わっている。また、不登校児童生徒の増加に伴い、教室以外の学びの場を確保するためのサポートルームや相談室、男女別の更衣室のニーズが高まり、校内でのスペース確保が難しい状況である。数年前のコロナ禍で、一部の学校は放課後児童クラブのために余裕教室を提供しているが、すぐに確保できる訳ではない。今後は学校や教育委員会と話し合い、教室の使用を協力して進めたいと思う。

他県の学校施設では、放課後にシャッターや警備を活用し、上手く校舎を児童クラブに活用している例が見られ、こういった事例を研究していきたい。

○ 市長

地区ごとの待機児童数が示されているが、主に待機児童が多いのは7地区中3地区で、これらの地区では学校の児童数も増加している。余裕教室は、特別支援教室や不登校児童等の相談室などに使うため、放課後児童クラブとして活用していくのも難しい状況である。

放課後児童クラブの部屋を確保するため、学校と協議をする場合も、管理責任の問題がある。また、学校内にクラブを開室すると、問題が起きた時に先生が対応しなければならず、働き方改革に逆行するとの意見もある。

待機児童の多い地区や校区はある程度分かっているので、具体的にどうやったら待機児童が解消できるのか、学校側で対応できる範囲を明確にし、それ以上は市長部局が対応するなどの、個々の協議が必要である。

中部地区には14の民間教室があり、空きも見られるのであれば、公立が難しければ民間施設を活用するなど、具体的な解決策について教育委員会と健康福祉局が話し合い、責任を持って解決に努めることが必要でないか。今後、具体的な状況を共有し、解決策のための話し合いを始めていけたらと思う。

目標は待機児童ゼロ。預けたくても駄目と思って申請していない方も含めて、できるだけゼロに近づくような形で解消を図るために、教育委員会と健康福祉局が連携を強化して努めていくこととしたい。

協議事項2の「一高生のシビック・プライド醸成につながる産学民官の共創に向けて」に移らせていただく。教育局高松第一高等学校長から説明をお願いする。

【議題（２）】

○ 事務局（高松第一高等学校長）

（「一高生のシビック・プライド醸成につながる産学民官の共創に向けて
～SSHにおける行政・企業とのコラボ～」説明。）

○ 委 員

３期 15 年間の SSH の取組により、生徒の探究心と学びが深まっていると感じた。生徒の意欲と先生の計画や指導のフォローがあってこそその成果だと思う。

うどん店の排水や観光資源の活用など地域課題を考えた研究が見られ、興味深い。子どもたちが行政や企業と協力して研究テーマを見つけ、それを大学まで継続して研究し、地元の企業や行政に就職できる道筋ができることが望ましい。地元に戻ってくる子どもたちが増えるような、明るい未来につながる取組になればいいと思う。

○ 委 員

今回の取組は、学生が行政や企業と協力し、主体的に研究する素晴らしい取組だと思う。これまでのシビック・プライドの醸成を目的とした取組も効果があったと感じているが、今回はそれを更に超える。今回の取組を進め、その成果を市民に広く発信していただきたい。

○ 委 員

一高のユニークな生徒の研究を紹介していただき、若い人が柔軟に考えたことが伝わった。

グローバルな人材育成のためには、国際的な場で英語での発表や論文発表の機会を提供することが重要。理系だけでなく文系の生徒も一緒に参加できるチャンスができるのではないかな。高校生の段階で深い研究を行うことは、生徒の生涯にわたって良い影響を与えらると思う。早期にサイエンスや英語での発表の場があれば非常に有益だと思う。

○ 事務局（高松第一高等学校長）

２年生は３月に英国研修があり、現地で自分達の研究内容を英語でプレゼンを行う。高松市の小・中学校の ALT の先生が毎日来て、英語の特訓をしていただき、英語の表現力と会話を鍛えている。

○ 委 員

一高と県内の他の県立高校の大きな違いは、高松市を独り占めというか、密接な関係にある点である。市とつながることで、義務教育とつながることができ、行政とも連携できる。これは他の文科省指定校とは異なるアピールポイントであると思う。また、シ

ビック・プライドの醸成についてもどんどん進めてほしいと思う。

今後も卒業生の追跡調査を行っていただき、調査の中で、「高松市のためにこういうことを思いつくようになった、貢献ができるようになった」といった具体的な成果が明らかになると、更に良いと思う。

○ 委 員

SSH の卒業生は約 474 名いるが、30%ほどしかつながっていないので、卒業生とのつながりをもってほしい。多くの素晴らしい卒業生がいるので、もっと卒業生とつながる方策を考えていただき、シビック・プライドや愛校心を高めていただけたらと思う。

○ 教育長

一高が SSH の事業を 15 年間も継続できたのは、先生方の多大な努力とエネルギーと、これにかけた相当の時間の結果であったと思う。

今回、「産学民官の共創」というタイトルで、行政や企業とコラボすることに関しては、教育委員会は学校と地域の連携・協働に取り組んでおり、合言葉は win-win の関係というか、「学校にとっても連携してよかった。地域にとっても地域が活性化してよかった。」というところが、長続きする秘訣だと考えている。

この事業が続くためには、子どもたちのシビック・プライドを醸成することも大事ですし、また、校長先生もおっしゃったように、すべてのオーダーを一高が受けるのではなく、子どもたちが主体的に課題を選び、取り組むことが、長続きの 1 番の秘訣だと感じた。

教職員が子どもの研究に多くの時間を費やしているが、企業とコラボすることで専門人材の指導を受けられる機会を得て、教職員の負担軽減にもつながれば望ましいと感じた。

STEAM 教育については、高校で専門的に進める一方、小・中学校では土台となる教育を進めている。一高の取組を小・中学生と教員に広げる機会ができたことが嬉しく、ぜひお願いしたいと思っている。文化祭に行った中学生は、「すごい、SSH。自分も一高に入りたい。」という子がたくさんいる。そういった機会を多くの子どもたちに広げる機会を、教育委員会も一緒に考えさせていただけたらと思う。

○ 市 長

初めて SSH の取組をしっかりと聞かせていただき、15 年間のしっかりした教育の積み重ねで成果が出てきていると感じた。

高校 3 年間は大学受験の勉強が主体にならざるを得ないので、SSH のような自発的な研究は後ろに流されがちと思うが、学校側で生徒が主体的に取り組める環境作りをしているかどうかお聞きしたい。

高校 3 年間で終わっては、大きな成果を出すのは難しいと思うが、大学や高专との

連携はあるのか。香川大学の創造工学部などの連携協力はあるのか教えていただきたい。

○ 事務局（高松第一高等学校長）

3 年生の研究に時間をとられると、受験勉強の時間がとれないという課題があったため、次年度から教育課程を変更し、研究を 2 年生でほぼ完成させ、3 年生はその整理に努めつつ、受験勉強に重点を置くようにした。これにより、大学受験とのバランスを取っている。

推薦入試が増えており、SSH の取組が面接や論文に役立つため、そちらの指導にも力を入れたいと考えている。

○ 事務局（高松第一高等学校教頭）

大学との連携についてだが、SSH をやった生徒の入試枠があり、研究が続けられる大学もある。本校からも生徒が入学しており、大学と連携を行っている。

○ 市 長

一高の SSH の取組が更に充実して、生徒のシビック・プライドが醸成され、将来の市政や地元企業に関わっていただきながら、より高松の発展に参加していくことを願いたいと思っているところである。

それでは進行を事務局にお返しする。

○ 事務局（教育局長）

教育委員の皆様方には、総合教育会議に御協力いただいたこと心よりお礼申し上げます。次回、令和 7 年度第 1 回高松市総合教育会議の開催については、7 月頃を予定している。日程、議題等については別途調整させていただくので、よろしくお願い申し上げます。今後とも、御協力賜るようお願い申し上げます、閉会とする。